

2026年5月3日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教80「さあ、立て、出かけよう」

イザヤ54：10、ヨハネ14：25～31

今日の御言葉の最後に「さあ、立て。ここから出かけよう」（31節）とあります。「出かけよう」（アゴー）という言葉は、どこから連れ出す、引き出すという意味があります。しばしば強制的に連行するという意味にもなります。例えば、福音書でイエスさまを裁判に引き出すという箇所にも使われます。イエスさまが「さあ、立て。ここから出かけよう」と言われるのは、ある場所から引っ張り出されるようなことなのかもしれません。イエスさまは、わたしたちに向かって「いつまでも、そんなところにはいけない。いい加減、立ち上がって、出ていこうじゃないか」とおっしゃっておられます。

よく「重い腰をあげる」と言います。だんだん居心地が良くなって、そこから抜け出すことが困難になります。もしそれが罪の支配ならどうでしょう。わたしたちはすぐに立ち上がることができるでしょうか。特に、わたしたちの信仰では、わたしたちは神さまと人を憎む方に生まれつき心が傾いていると言います（ハイデルベルク信仰問答）。生まれながら罪の中にあるのですから、もう罪の状態が普通、当たり前になっているでしょう。だからそこから抜け出すことなど考えたこともないですし、そこから抜け出した先に新しい世界が広がっていることなど頭にも浮かばないのです。

けれども教会が語ることはそこに尽きるのではないかと思います。「そこはお前のいる場所ではない。さあ、立て。ここから出かけよう」と。罪の状態が当たり前だと思っている人々に、それは当たり前ではない。本来の生きるべき命がある。もっと人間らしく生きられる場所がある。そう説得するのは大変なことでしょう。それが伝道の本当の困難さなのかもしれません。でもそれを言い続けるのが教会の使命です。

27節に「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」とあります。ここにはイエスさまが与える平和と世が与える平和と二つの平和が対置されています。世が与える平和というのは、まさしく世の支配者が来てもたらす平和でしょう。それは力による平和です。一見、何事もなく、平和のように見えるかもしれませんが、けれどもそれは力によって押さえ込まれ、黙らされているだけの状態です。そこには「心を騒がせるな。おびえるな」（27節）とあるように、支配者の力の前に心を騒がせ、怯える人々の姿があります。誰も何も言えなくなる。そうなるとその社会はもう破滅に向かって転がり落ちるだけです。それはすでにわたしたちの身近に実際に起こっていることでしょう。独裁者が起こり、その力の前に何も言えなくなることが起こります。これまではいわゆる共産圏の国々がそういう支配傾向にありましたが、今は民主主義を掲げて来た国々でもそういう流れが起こっています。顕著なのはアメリカでしょう。武力によって平和は実現できると本気で考えています。アメリカの防衛費は莫大ですが、それをさらに増大しています。その反面、教育や医療、環境などの分野の予算は削減する。指導者によってこんなにも世界は変わります。かつてわたしたちの国に信仰を伝えた国であるゆえにとっても残念です。しかしそのような世の支配者が与えるような平和の上にわたしたちはあぐらをかいて、それがまるで平和であるかのように考えているのではないのでしょうか。「平和がないのに、『平和、平和と言う』（エレミヤ6：14）そういう世の中になっているのではないのでしょうか。

そのように考えますと、イエスさまが言われた「さあ、立て。ここから出かけよう」という言葉の意味がだんだん見えて来るのではないのでしょうか。「世の支配者が来る」(30節)それは単にこの世の王ということだけではありません。それは罪の支配であり、サタンの力、そう理解してよいでしょう。それとの決別です。そこに留まり、安穩とするのではない。それを当たり前とするのではなく、その罪と死の支配から立ち上がり、出て行くこと。罪と決別し、イエスさまが与えてくださる新しい命へ踏み出すのです。

イエスさまは十字架で死に三日目によみがえられて、わたしたちにその命を与えてくださいました。十字架でわたしたちを支配する罪を滅ぼし、よみがえりによってもはや罪に支配されない新しい命を備えてくださいました。『ハイデルベルク信仰問答』では、人間の悔い改めと回心について、古い人の死滅と新しい人の復活と表現しています。古い人の死滅は、「心から罪を嘆き、またそれを憎み避けるようになる」(問89)と教えます。罪の中に安穩とするのではなく、それを憎み、避ける。そして新しい人として、「心から神さまを喜び、神さまの御旨に従った善い行いに生きること」を教えます(問90)。それが、イエスさまが残し、与えてくださる平和です。

ヨハネ福音書の第20章に、よみがえりのイエスさまが弟子たちに現れるところがあります。この時、弟子たちは家の戸に鍵を閉めて閉じこもり、恐れ、怯えておりました。けれどもその只中によみがえりのイエスさまがお立ちになられ、「あなたがたに平和があるように」(20:19)と言われます。それはイエスさまがよみがえられて、わたしたちを支配するこの罪に勝利されたからです。罪の支配の終焉です。だからもうそこに捕らわれて生きるのではない。あなたがたはもう罪から救われ、自由になった。

イエスさまが「さあ、立て。ここから出かけよう」と言われるのは、他でもない、弟子たちが閉じこもっていた部屋、それはわたしたちの心、罪に支配されている自分自身と言ってもよいでしょう。その中に閉じこもっているわたしたちを、イエスさまが引っ張り出してください。そのためにイエスさまは十字架で死んで三日目によみがえってくださった。その御業によって、わたしたちを罪と死の支配から立ち上がらせてくださったのです。そこには未練はありません。罪に支配されない、新しい命の世界がそこから始まります。

天の父よ。罪と死の支配の中に安穩とし、そこにあることが当たり前になってわたしたちに、あなたは「さあ、立て。出かけよう」とイエスさまの与えてくださる平和、新しい命へと呼び覚ましてくださいます。どうぞこの呼びかけに応えることができますように。罪と決別し、神さまの御心に適う歩みへとわたしたちを導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。